

富山高等専門学校

# 同窓会 会報



National Institute of Technology,  
Toyama Alumni Association

## Vol.6

2026年3月発行

編集・発行 富山高専同窓会  
同窓会HP/nc-toyama-dousoukai.jp



左 若潮丸V世進水  
(下関・三菱造船所 令和7年10月23日)  
右上・中 志峰祭  
下 進水式で支綱切断する本校学生

挨拶 | 定期総会 | 退職教員からのメッセージ  
近況報告 | 新理事紹介 | 編集後記

メールアドレスの登録をお願いします  
詳しくは同窓会HP「お知らせ」をご参照下さい。

## 会長挨拶

### 同窓生の皆様へ

富山高等専門学校同窓会長

I17 稲積 佐門



皆様いかがお過ごしでしょうか。日頃より富山高等専門学校同窓会の活動にご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。さて、今年も多くの新たな卒業生を迎え同窓会の輪がさらに広がりました。同窓会は、卒業生同士の絆を深め、母校とのつながりを維持する大切な場です。これからも多くの方が気軽に参加できるような同窓会活動も進めていきたいと考えております。

「令和6年能登半島地震」から2年あまり経ちました。私の住み暮らす氷見市の海岸線に近い地域は液状化がひどかったこともあり、住宅の解体が進み、今ではほとんどが更地になっています。まだまだ完全復旧には時間がかかると思いますが、震災前以上の賑わいが戻るよう努めてまいります。

さて、今年度は大きな事業があります。新若潮丸の就航です。令和7年3月に起工式、令和7年10月に進水式が行われ、いよいよ来週の令和8年3月20日に若潮丸竣工記念式典が開催されます。我々同窓

会からもこの記念事業に対し寄付をさせていただきます。この新若潮丸が学生の教育・研究環境の充実・整備に貢献することを祈念しております。

また、私事ではございますが、令和7年7月に長女が産まれました。夫婦で協力しながら日々育児に追われていますが、毎日の子どもの成長を目の当たりにし大変ながらも楽しんでおります。

これからも、同窓生の皆様が交流を深め、互いに刺激を受けあいながら、それぞれの分野で活躍できるよう、同窓会の活動を充実させていきたいと考えていますので是非、同窓会活動へのご参加やご意見をお寄せいただければ幸いです。

最後になります  
が、同窓生の皆様のご健勝とさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。



## 学校長挨拶

富山高等専門学校校長

國枝 佳明



富山高等専門学校同窓会の皆さまには、日頃より本校の教育・研究活動への深いご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

国立高専では、基礎科目と専門科目を効果的に配置し、実践力のある人財の育成に努めています。Society 5.0時代の社会構造の変化や技術の高度化、地域・産業のニーズに応えるため、学生が自律的に課題へ取り組み、生涯学び続ける力を育む教育の高度化を推進しています。

本校では令和2年度にディプロマポリシー、令和3年度にカリキュラムを改正し、AI・データサイエンスの素養とビジネスの視点を身につけ、新たな価値創造に挑戦できる人財育成を推進してきました。その成果として、文部科学省が定める数理・データサイエンス・AI教育プログラムにおいて、全学科でリテラシーレベル、リテラシーレベルプラス、応用基礎レベルの認定を受けております。

また、1年生対象の産学連携教育（Ti-TEAM）、IT企業による特別講義、ビズリーチを活用したAI副業先生の授業、Amazon Web Services（AWS）アカデミーの活用な

ど、多様な実践教育を通して、社会で活躍できる学生の育成に力を注いでいます。さらに、留学生の受け入れやタイ高専生の1か月研修の受け入れ、海外インターンシップの拡充など、国際的に活動できるグローバル人財の育成にも積極的に取り組んでいます。

令和7年度には、DCONでの3位および5社からの企業賞受賞、ロボコン全国大会2年連続ベスト8および企業賞（本田技研工業）受賞、英語プレゼンテーションコンテストでの優勝など、多くの学生が素晴らしい成果を上げました。私は彼らの活躍から大きな励ましと元気ももらっています。

さらに令和8年度には、新「若潮丸」が就航予定です。実習や研究航海に加え、災害時の支援など幅広い活用が期待されています。海や船の魅力、そして本校学生の活躍を、より多くの方々知っていただける機会にしていきたいと考えています。

来る令和8年度も、学生たちが様々な場面で成長し、挑戦していく姿を楽しみにしています。引き続き、同窓会の皆さまの温かいご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

## 卒業生へエール!

## 富山高専同窓会から卒業生の皆様へ お祝いのメッセージ

富山高等専門学校同窓会長  
稲積 佐門

卒業生の皆さん。本日は御卒業、誠にありがとうございます。また、ご家族の皆様にも心よりお祝いを申し上げますと共に、國枝校長先生、ならびに諸先生方のご功勞に対し、改めて敬意を表したいと存じます。皆さんは、本校において専門分野の高度な知識と実践的技術を習得されました。5年間という一貫教育の中で培われた論理的思考力、課題解決能力、そしてチームで成果を生み出す力は、これからの社会において大きな強みとなることでしょう。我々同窓会は、世代や分野を超えた卒業生同士のネットワークとして、皆さんの挑戦を応援し、必要な時には支え合える存在でありたいと考えています。

現在の同窓会の活動は統合前のほんごう会および北斗会が行ってきた事業を継承し実施する予定でしたが、新しい同窓会がスタートしたタイミングで、新型コロナウイルスが蔓延したことにより、いまだ思うような活動ができていない状況が続いていますが、富山高専同窓会はまだまだ若い同窓生の会でもありますので、これから若い同窓生らしく、皆様と共に色々な事業を

考えて新しい取り組みにチャレンジしていければと考えておりますので卒業生の皆様には、是非ともこれからの同窓会活動に参加、協力して頂きたいと思っております。

最後になりますが、これからそれぞれの道を歩んでいくこととなりますが、皆さんが個々の道でご活躍されること、また、一緒にこの富山高専同窓会を盛り上げて頂けることを祈念し同窓会を代表してお祝いとお願いの言葉といたします。

本日は誠にありがとうございます。



## トピックス

令和7年10月5日、富山市八尾スポーツアリーナにて開催された「アイデア対決高専ロボコン東海北陸地区大会2025」の開会のあいさつで、本校國枝佳明校長が高専教育における高専ロボコンの意義について述べられましたので紹介します。

### 富山高等専門学校校長 國枝 佳明

皆さまこんにちは!

ただいまご紹介いただきました、運営委員長を務めております富山高専校長の國枝です。

まずは、ようこそ富山へ!ようこそ富山市八尾スポーツアリーナにお越しいただき、ありがとうございます。

さて、アイデア対決高専ロボコンは、将来技術者を目指す若者たちに、既成概念にとらわれず、「自らの頭で考え、自らの手でロボットを作る」ことの面白さを体験してもらい、発想することの大切さ、ものづくりの素晴らしさを共有してもらう全国規模の教育イベントです。

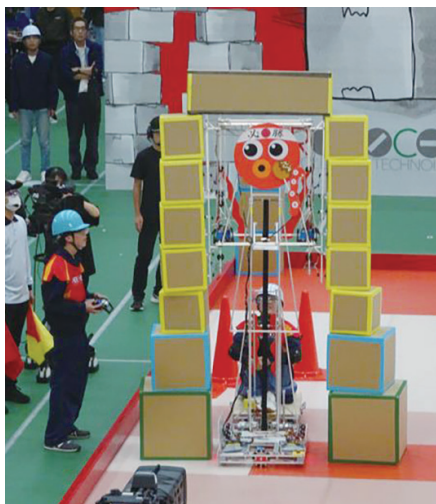
ご存じのとおり、高専は中学校卒業後、5年間一貫して専門教育を行う世界的にもめずらしい教育制度です。授業では講義に加え、実験・実習を多く取り入れ、「人づくり」、「ものづくり」、「ことづくり」に適した教育環境を提供しています。この環境で特徴的な活動が、この高専ロボコンです。困難な課題に自ら考え挑戦し、仲間と協力して成果を上げる姿は、富山県が推進する「ウェルビーイング」に通ずるものがあります。

今年も難しい課題に、果敢に挑戦してきた選手とそのチームの皆さん、これまで困難の連続だったのではないのでしょうか?何度も挫折しながらも力を合わせて乗り越え、今日の日を迎えら

れたことと思います。ぜひ皆さんのアイデアと努力の成果を存分に発揮してください。

応援団の皆さん、そして観客の皆さまには、これから始まる競技そのものに加え、選手たちの優れた発想や努力の積み重ねにも思いを寄せていただき、温かいご声援をお願いいたします。

最後になりますが、ご後援いただいています各機関、特別協賛、協賛、特別協力、協力の企業の皆さま方には心より御礼申し上げます。また、審査員の先生方、本大会の準備から運営に至るまでご協力いただいています多くの皆さま方に深く感謝申し上げます。簡単ではございますが、開会のあいさつとさせていただきます。



大会結果の発表（優勝の賞状と楯を受け取って）



地区大会の様子

## 高専ロボコン 両キャンパスのチームが全国大会出場!

### 3年間のロボット製作を振り返って

電気制御システム工学科3年  
初山 佳蓮



私は1年生の時、友人に誘われたことがきっかけでメカテック部に入部しました。それまでは「高専ロボコン」という名前は聞いたことがあったものの、実際にどのような活動をしているのかはほとんど知りませんでした。

入部して間もない頃、先輩方が全国大会に出場することになり、後輩教育の一環としてピットクルーとして同行させていただきました。そこで初めて他校のロボットを間近に見て、その完成度の高さやアイデアの面白さに圧倒され、一気にロボット製作に興味を湧いたのを覚えています。

2年生になると、初めて製作メンバーとして活動に加りました。しかし、実際に作る側になると分からないことばかりで、作業が進まず苦戦する毎日でした。この年は力不足もあり、地区大会で敗退して全国大会に行くことができず、非常に悔しい思いをしました。

3年生では、設計とチームリーダーという役割を任されることになりました。今年の競技課題は「Great High Gate」です。これは、ロボットがボックスを積み上げて自ら「ゲート」を作り上げ、そのゲートを、人が乗った台車と一緒に通過するという競技です。高さのあるゲートをいかに安定して構築するか、そして安全に人を乗せて通過するかという課題に対し、約6カ月間、試行錯誤を繰り返しながら一生懸命にロボット製作に打ち込みました。

設計段階でのミスや、チームをまとめる難しさに頭を抱えることも多々ありましたが、メンバーと協力して一つずつ課題をクリアしていきました。その結果、地区大会では私たちの独自の機構が評価され、「アイデア賞」をいただくことができました。念願の全国大会出場が決まった時は、自分が手をかけたロボットがようやく認められた気がして、言葉にできないほど嬉しかったです。

全国大会では、本田技研工業様から「HONDA

賞」をいただくことができました。自分たちが苦労して作ったロボットが評価され、大きな達成感を得ることができました。

振り返ってみると、ロボコンは常に新しいことに挑戦する場であり、自分を大きく成長させてくれる貴重な機会だったと感じています。これからは、自分が先輩方から教わったように、後輩たちへ知識や経験を伝えていく番です。部のさらなる発展に貢献できるよう、これからも精一杯取り組んでいきたいと思います。

## 仲間と歩んだ6度目のロボコン

(専攻科) 制御情報システム工学専攻1年  
益子 聖



専攻科1年の益子です。今年で6度目となるロボコンは、1年生を含む新Bチームの監督として、できるだけ機構がシンプルになるロボットを作ることが目標に取り組みました。結果は、ロボットのコンセプトが評価されて協賛企業賞をいただきましたが、当初実現しなかったアーチは作ることができず、個人的には悔しさの残るとともに、チーム運営の難しさを改めて実感しました。

何年もロボコンに携わって分かったことがあります。それは、より良い結果を得るには相応の時間と労力をかける必要があるという、至極当たり前の事実です。しかしロボコンにおいては、その量を一人だけで賄うことはできません。チームで協力し、お互いに技術を補い合いながらロボットを作り上げる必要があります。このチーム一丸となって制作に取り組むことこそが、ロボコンの醍醐味だと私は考えています。

ロボットを1台作るにしても、どんな動きが必要か、それはどんなモーターや部品で実現できるか、回路や制御はどうするかなど、考えることは無数にあります。機構が完成した後も、本当にその形が最適なのかと改良し続けることが重要で、とにかくやることが尽きません。Bチームは完成した機構を見直す十分な時間を確保できず、結果として理想とするロボットは完成しませんでした。振り返れば、私のロボコン人生の8割くらいはそうした状態で、それだけロボコンに求められる労力が大きいことを改め

て実感しました。

ロボコンの準備期間は半年と長く、高い熱量を維持しながらロボットを作り続けるのは簡単ではありません。そんなときは改めて「自分は何のためにロボットを作るのか」を考えてみてください。「設計が好き」「強いロボットを作って相手を驚かせたい」「チームに貢献したい」など理由は何でも構いません。自分のやりたいことに積極的に取り組むことが、良いロボットを作る近道だと思います。私の場合は、大勢で一つの目標に向かって頑張ること自体が楽しくて大好きです。だからこそ今までロボコンを続けてこられたのだと思います。先輩にロボコンのなんたるかを教わった初めての大会も、同級生と徹夜で作業した4年生の大会も、今となってはすべて良い思い出です。

ロボット制作は大変なことが多いですが、その分、理想のロボットが完成したときの感動や達成感は格別だと感じます。Aチームの地区大会優勝と全国ベスト8は、これまでの努力が生んだ結果であり、本当に素晴らしい成果です。今年の大会で得た気づきや課題を来年に生かし、さらなる高みを目指して一層技術とチームワークを磨いていってください。



## 「若潮丸から垣間見る水環境」 － 若潮丸Vの就航を前に －

富山高等専門学校校長  
國枝 佳明

### 1. はじめに

2025年10月23日、練習船若潮丸V（以下、若潮丸）の命名・進水式が行われました。昭和32年（1957年）の初代就航以来、5代目となる本船は、海で学ぶ若者の成長と新しい潮流、そして未来への門出を象徴する名を継承しています。

若潮丸は、学生の実習・訓練に加え、海洋観測や災害支援、地域の学びの場としての活用も期待されています。本稿では、富山湾をはじめとする富山県の豊かな水環境を「海から見て考える」視点で紹介し、若潮丸の新たな役割を展望します。

### 2. 海から見た水環境

水環境とは、河川・湖沼・海・地下水など水を取り巻くすべての環境を指します。人間活動の影響で水環境の悪化が進む中、海はその「鏡」とも言える存在です。海は水循環の最終地点であり、同時に出発点でもあります。陸域での農業・工業・生活によって生じる栄養塩や汚染物質は河川を通じて海へ流れ込み、富山湾のような閉鎖性海域では水質悪化や赤潮の原因となります。しかし同時に、海は陸域環境を映し出す指標でもあります。海を環境を観察することで、流域全体の健全性を把握でき、環境保全の出発点となります。

富山湾の豊かな生態系は、黒部川や庄川など山から海への水のつながりに支えられています。若潮丸の教育・研究活動は、この「つながりの可視化」を可能にし、海から地域環境を俯瞰する貴重な学びの機会を提供します。

### 3. 富山湾の特徴

富山湾は急峻な地形と豊富な河川流入を特徴とし、わずか数キロ沖で水深1,000mを超える世界でも稀な湾です。急流河川が供給する淡水と栄養塩が豊かな漁場を形成し、外洋水との水塊交換が富栄養化を防いでいます。

一方で、深層では季節的に酸素が減少し、貧酸素化の懸念もあります。気候変動による海水温上昇や生態系の変化も進みつつあり、持続的な観測が求められます。

### 4. 若潮丸の概要と使命

若潮丸は安全で効率的な実習を支える最新の設備を備え、内燃機関と電気推進を組み合わせたハイブリッド

方式を採用しています。これにより、環境負荷を低減しながら多様な航行条件に対応できます。また、災害時の物資輸送や医療支援、沿岸調査など多目的な運用が可能であり、「教育・研究・社会貢献」を三位一体で担う次世代の練習船として設計されています。

### 5. 海洋観測・研究・教育への展開

若潮丸ではCTD観測やADCP観測による水塊構造・流動解析、深層水の入れ替わり調査、マイクロプラスチック分析など、海洋環境に関する多様な研究が可能です。観測データは地域教育や産学官連携の教材として活用され、富山湾の「見える化」を進めます。

さらに、子どもたちへの航海・操船体験や観測体験を通じて、「海を学び、海を好きになる」海洋教育を展開します。これらの活動は、次世代に海と人の共生意識を育てる貴重な機会です。

### 6. おわりに

若潮丸は、日本海側唯一の高専練習船として、富山湾という特別なフィールドで教育・研究・地域貢献を担います。水環境を「海から見る」ことで、地域から地球までつながる水の循環を実感し、「海と共に生きる社会」を考える契機となるでしょう。

最新の实習設備とAI・データサイエンス教育の融合により、富山高専はGX・DX時代を牽引する人材を育成し、若潮丸はその象徴として未来へ航海を続けます。



若潮丸の完成イメージ

## 進水式に参加して

商船学科5年  
船木 万莉

5年間私たちの実習を見守ってくれた若潮丸が生まれ変わるということで、進水式に参加する機会を頂きました。進水式に参加するということは誰にでも出来ることではないと先生方や関係者の方から聞いており、そのような貴重な体験の機会を頂いたことに深く感謝しております。

式典は爽やかな秋晴れの下、華やかな雰囲気の中で行

われました。造船関係者はじめ、現地の学生さんや幼稚園の子供たち、議員の方や高専本部からお越しになられた先生方など合わせて400名近くの人々が若潮丸の進水を見届けました。5年生は全員白制服に制帽を被って式典に参加しました。白制服に身を包み、どこか誇らしげな表情で若潮丸を見上げるクラスメイトの姿に胸がいっ

ばいになりました。

式典の中で私は支綱切断という大役を任せて頂きました。船を支えている最後の綱を斧で切断するという役割です。式本番前にリハーサルで支綱切断の練習をさせて頂いたのですが、想像していたよりも力を入れて斧を振り下ろさないと綱が切れなくて驚きました。支綱切断は三人で行ったので力やタイミングを合わせるのも難しかったです。私たち支綱切断者は来賓の方々や進水式台という少し高い位置で進水式を過ごしたのですが、そこからは会場全体を見渡すことができ、改めて進水式の規模の大きさに目を見張りました。大勢の人々から注目を浴び、式典本番で斧を振り下ろす瞬間は大きな緊張が走りましたが、無事役目を果たすことができました。華やかなマーチングバンドの演奏と子供たちの歓声の中、若潮丸がゆっくりと水面を切って進んでいく様子に言葉にならない感動を覚えました。

私たちは来年卒業を迎えるため、今回生まれ変わった若潮丸で実習を行うことは叶いません。それでも、進水式に立ち会い支綱切断という貴重な役割を担えたことは、

一生の思い出となりました。若潮丸がこれからの長い航海に旅立つ姿はまるでこれからそれぞれの未来へ漕ぎだす私たちの背中を押してくれるようでした。結びにはなりますが、私たちが進水式に参加するためにご支援くださった北斗会ははじめ関係者の皆様には心より感謝申し上げます。この経験を胸に、これからの進路でも誇りを持って歩んでいきたいと思いを。



右が筆者

## 練習船「若潮丸」V世 ご紹介

2026年3月13日新生「若潮丸」V世(以下「若潮丸」)が三菱造船株式会社様より富山高等専門学校へ引き渡されました。

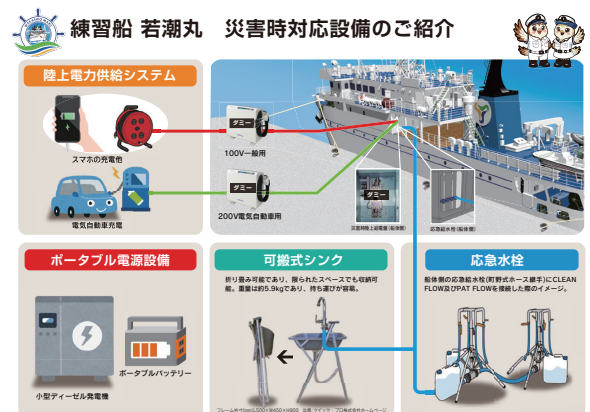
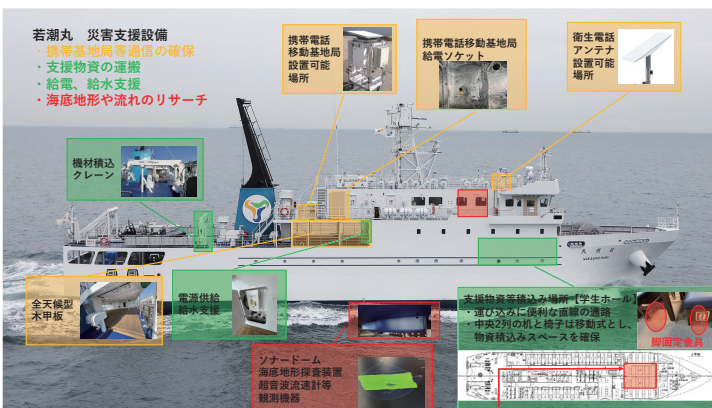
代船建造の記念行事は、2025年3月6日三菱造船株式会社江浦工場において挙行された起工式に始まり、2025年10月23日三菱造船株式会社江浦工場において、5世となる練習船「若潮丸」の命名・進水式が挙行され、当日は、多数のご来賓にご臨席いただき、式典では、独立行政法人国立高等専門学校機構の谷口理事長から、練習船「若潮丸」と命名され、本校商船学科5年の森下紗也子さんと船木万莉さん、並びに商船学科3年の畠水琉花さんの3名の支綱切断によって無事進水し、出席者一同で新たな「若潮丸」の門出を祝いました。

その後、艀装工事、試運転などを経て2026年3月13日、1995年以来31年ぶりとなる新船「若潮丸」が竣工し、引き渡されました。本船は今後、乗船実習や、海洋に関する調査研究を通して、海洋人材の育成や、地域での社会貢献、海事思想普及に向けたさまざまな教育・地域貢献活動な



どもに従事する予定です。また、自然災害発生時の支援物資輸送や居住設備提供といった各種災害支援機能も有しています。2024年1月1日に発生しました能登半島地震の際も七尾港への支援物資の輸送を行った「若潮丸IV世」ですが、その時必要と感じたことなどを「若潮丸V世」には盛り込んだ構造となっています。

今後も学生の実習や研究に地域貢献に活躍する「若潮丸」を温かく見守っていただければ幸いです。



# 令和7年度 富山高等専門学校同窓会

## 定期総会

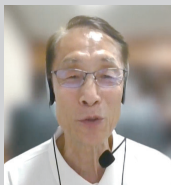
日時

令和7年6月23日(月)  
19時30分～

● Microsoft Teams によるリモート会議

令和7年度 富山高等専門学校同窓会定期総会を、令和7年6月23日(月)19時30分からMicrosoft Teams によるリモートで開催しました。

はじめに稲積同窓会長と國枝校長よりご挨拶を頂き、次に森田副校長より母校近況報告についてお話を頂いたあと議事に入りました。予定の審議事項はすべて承認されました。



國枝校長



森田副校長



稲積会長

令和7年度 富山高専同窓会定期総会Web会議の様子

### 次第

1. 開会
2. 会長挨拶 稲積佐門会長
3. 来賓挨拶 國枝佳明校長
4. 母校近況報告 森田康文副校長
5. 議事

### 審議事項

- (1) 令和6年度事業報告(案)について
- (2) 令和6年度決算報告(案)について
- (3) 令和6年度会計監査報告について
- (4) 役員人事(案)について
- (5) 令和7年度事業計画(案)について
- (6) 令和7年度予算(案)について
- (7) その他

## 総会資料(抜粋)

### ○令和6年度 富山高等専門学校同窓会 事業報告

令和6年4月4日	入学式に出席(稲積会長)
5月13日・22日	令和6年度会計監査を実施(河村監査、山崎監査)
5月22日	3同窓会長の校長訪問(稲積会長)
6月18日	第1回理事会を開催(Web会議)
6月28日	名簿管理システムテストラン開始
7月25日	第1回総会を開催(Web会議)
9月25日	商船学科卒業証書授与式及び専攻科海事システム工学専攻修了証書授与式に出席、同窓会への加入説明(稲積会長、水谷理事、金山理事)
10月1日	名簿管理システム導入開始
10月31日	富山高等専門学校技術振興会理事会・総会・交流会に出席(稲積会長)
令和7年3月6日	若潮丸起工式出席(玉川理事)
3月6日	新入生入学説明会における同窓会への加入説明(中島先生、布目先生)
3月11日	卒業証書授与式及び専攻科修了証書授与式に出席、同窓会の説明(田嶋理事)
3月31日	同窓会会報をホームページに掲載

### ○役員人事(役員の改選)

【理事退任】	【理事就任】
副校長 佐瀬 直樹	副校長 森田 康文
	M40 才記 由次
※ その他の理事は留任	M40 向川真太郎

## ○令和7年度 富山高等専門学校同窓会 事業計画

令和7年4月 3日	入学式への出席（稲積会長）
4月25日・5月 4日	令和6年度会計監査を実施（河村監査、山崎監査）
5月26日	3同窓会長と富山高等専門学校校長との面談（稲積会長）
5月28日	第1回理事会を開催（Web会議）
6月23日	第1回総会を開催（Web会議）
9月25日	商船学科卒業証書授与式及び専攻科海事システム工学専攻修了証書授与式への出席・同窓会の説明
10月23日	新若潮丸進水式
11月	富山高等専門学校技術振興会理事会・総会への出席（稲積会長）
令和8年3月	新入生入学説明会における同窓会への加入説明
3月	新若潮丸竣工式
3月10日	卒業証書授与式及び専攻科修了証書授与式への出席・同窓会の説明
3月下旬	同窓会会報をホームページに掲載

## 令和8年度 定期総会 審議事項(予定)

### 令和7年度 富山高等専門学校同窓会 事業報告(案)

令和7年4月 3日	入学式に出席（稲積会長）
4月25日・5月 4日	令和6年度会計監査を実施（河村監査、山崎監査）
5月26日	3同窓会長と富山高等専門学校校長との面談（稲積会長）
5月28日	第1回理事会を開催（Web会議）
6月23日	第1回総会を開催（Web会議）
8月19日	臨時理事会を開催（Web会議）
9月25日	商船学科卒業証書授与式及び専攻科海事システム工学専攻修了証書授与式への出席・同窓会への加入説明（水谷理事、金山理事）
10月23日	新若潮丸進水式
12月 2日	富山高等専門学校技術振興会理事会・総会・交流会への出席（稲積会長）
令和8年3月 5日	新入生入学説明会における同窓会への加入説明 （中島先生、佐藤理事、水谷理事）
3月10日	卒業証書授与式及び専攻科修了証書授与式への出席・同窓会の説明
3月20日	新若潮丸竣工式（稲積会長）
3月31日	同窓会会報をホームページに掲載

### 令和8年度 富山高等専門学校同窓会 事業計画(案)

令和8年4月	入学式に出席
4月	令和7年度会計監査を実施
5月	3同窓会長と富山高等専門学校校長との面談（稲積会長）
開催日未定	第1回理事会を開催（Web会議）
開催日未定	第1回総会を開催（Web会議）
9月	商船学科卒業証書授与式及び専攻科海事システム工学専攻修了証書授与式に出席、同窓会の説明
11月	富山高等専門学校技術振興会理事会・総会に出席
令和9年3月	新入生入学説明会における同窓会への加入説明
3月	卒業証書授与式及び専攻科修了証書授与式に出席、同窓会の説明
3月下旬	同窓会会報をホームページに掲載

## 母校近況



令和7年度  
射水キャンパス学生会長  
国際ビジネス学科5年  
本田 彩笑

### はじめに

今年度の学生会は、変化する環境に柔軟に対応しながらも、学生全員が主体となって楽しめる場を提供することを目標に活動してまいりました。長らく制限のあった学校行事も本来の姿を取り戻しつつある中、慣例通りに進まない場面もありましたが、その都度メンバーで知恵を出し合い、学生全員が主役となって楽しめる学校生活を目指して活動してまいりました。ここに、今年度の主な活動内容と、運営を通して得た成果と課題をご報告させていただきます。

例年であれば、本校の初夏の風物詩として「カッターレース大会」が開催される予定でした。しかし今年度は、長年学生たちの活動を支えてきた練習船「若潮丸」の引退に伴い中止になったことを受け、学生会では代替企画として「富山高専プチ運動会」を新たに立案・開催いたしました。競技種目には「台風の目」「障害物競争」「大縄跳び」、そしてクイズ要素を取り入れた「ファイブボンバー」の四種目を選定しました。高専における運動会の開催記録は極めて少なく、ルールの策定や会場設営など、運営側には多くの不安要素がありました。しかし、いざ幕を開けてみれば、学生たちの熱気あふれる声援がグラウンドに響き渡りました。慣れない運営で至らぬ点もありましたが、参加した学生からは「新鮮で楽しかった」との好評を博し、私たち運営メンバーにとっても、ゼロからイベントを作り上げる達成感を深く味わう貴重な機会となりました。

### 富山高専プチ運動会の開催

例年であれば、本校の初夏の風物詩として「カッターレース大会」が開催される予定でした。しかし今年度は、長年学生たちの活動を支えてきた練習船「若潮丸」の引退に伴い中止になったことを受け、学生会では代替企画として「富山高専プチ運動会」を新たに立案・開催いたしました。競技種目には「台風の目」「障害物競争」「大縄跳び」、そしてクイズ要素を取り入れた「ファイブボンバー」の四種目を選定しました。高専における運動会の開催記録は極めて少なく、ルールの策定や会場設営など、運営側には多くの不安要素がありました。しかし、いざ幕を開けてみれば、学生たちの熱気あふれる声援がグラウンドに響き渡りました。慣れない運営で至らぬ点もありましたが、参加した学生からは「新鮮で楽しかった」との好評を博し、私たち運営メンバーにとっても、ゼロからイベントを作り上げる達成感を深く味わう貴重な機会となりました。



### スポーツ大会

秋に開催されたスポーツ大会では、バスケットボール、ビーチバレー、サッカー、ドッチビーの四種目を実施しました。今年度、私たちが運営面で新たに挑戦したのが、「URLを活用した進行状況の共有」です。従来は試合結果やトーナメントの進行状況を掲示板へ手書きで張り出していましたが、情報の伝達速度に課題がありました。そこで今回は、スコアや進行状況を即座に反映・公開するための専用URLを作成し、全生徒がスマートフォンから最新の状況を把握できるシステムを導入しました。一方で、運用面での課題も浮き彫りとなりました。実施要項の周知とURLの添付を別々に行ってしまったため、URLのアクセス数が想定を下回る結果となったのです。また、昨年度に本郷キャンパスと連携して導入した「スポーツダイアプリ」の活用を見送ってしまったことも、大きな反省点として残りました。これらの経験は詳細な資料としてまとめ、来年度の学生会へと確実に引き継ぎ、より洗練された大会運営を目指すための糧とする予定です。



### 高専フェス

学生たちの個性が輝く「高専フェス」では、軽音部、吹奏楽部、ダンス部による迫力あるパフォーマンスに加え、有志による個人発表が行われました。特に今年度は、タイからの留学生の滞在期間と重なったことから、タイの学生による特別発表も実施されました。異文化に触れる貴重なステージは、例年以上の盛り上がりを見せました。どのステージにおいても、観客席からは大きな歓声や惜しみない拍手、そしてペンライトによる応援が送られ、富山高専の学生が持つ「温かさ」と「一体感」を改めて肌で感じる一日となりました。

## 母校近況

令和7年度  
本郷キャンパス学生会長  
電気制御システム工学科4年  
東 凛



今年度の学生会活動は、「クリーンな学生会」を目標に掲げ、学生会の活動目的や意義を広く周知することで、学生一人ひとりの活動意欲を高めることを目指しました。活動の透明性と開かれた雰囲気大切に、誰もが関心を持ちやすく、参加しやすい学生会づくりに取り組みました。

新たな取り組みとして、「出張目安箱」を導入しました。これは、月に一度、特宿の時間を活用して学生会への意見をフォームで集める活動です。定期的を実施することで、学生が気軽に意見を伝えられる機会を設け、学生会活動への関心を高めることができました。集まった声は、今後の活動の参考として活用され、より学生主体の運営につながっています。



学生会役員数が少ないという課題もありましたが、「出張目安箱」を通じて学生の声を拾い上げることで、活動の意義を伝える機会が増え、「自分も関わってみたい」と感じる学生が少しずつ増えてきました。

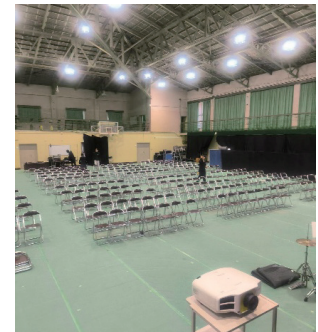
今年度は、活動の見える化と参加のきっかけづくりに力を入れた一年でした。来年度は、集まった声をさらに活かしながら、学生自身が動きたくくなるような、前向きで風通しの良い学生会活動を目指していきます。

## 志峰祭

今年度の志峰祭は、11月8日・9日の2日間にわたり開催され、学生会は模擬店運営とステージ企画の両面で中心的な役割を担いました。模擬店は一昨年には実施されていなかった挑戦的な試みであり、出店団体との事前調整や衛生管理の徹底、会計方法の明確化など、ゼロから仕組みを整える必要がありました。そのうえで、安全でスムーズな運営を実現できたことは、学生会にとって大きな成果となりました。当日の準備や片付けでは、場所ごとに担当を配置し、効率よく作業が進むよう全体の指揮をとりました。

また、今年度はスタンプラリー形式で構内展示を巡ってもらう工夫も行いました。外部の来場者が校内を回りやすいよう、展示場所ごとにスタンプを設置し、楽しみながら各展示を見てもらえる仕組みを導入しました。これにより、普段は見落とされがちな展示にも足を運んでもらえるようになり、学校全体の魅力をより広く伝えることができました。

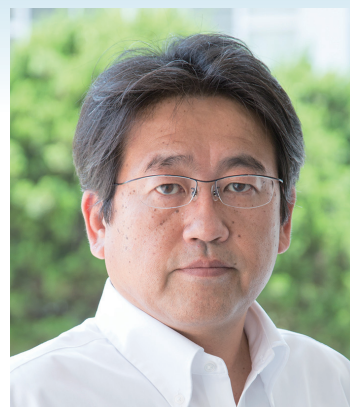
ステージ企画では、学生会が各企画の部門長を務め、必要な機材の準備や動作確認、進行内容の最終確認など、企画ごとの運営を統括しました。また、各企画の司会進行も学生会が担当し、出演者と観客が楽しめる雰囲気づくりに努めました。整然と並べられた客席や準備されたステージは、学生会が丁寧に環境を整えた成果でもあります。



これらの活動を通して、学生会は志峰祭の円滑な運営を支え、参加した学生や来場者が安心して楽しめる場づくりに大きく貢献しました。運営に関わる中で多くの学生と交流する機会も生まれ、学生会の活動意義を伝える良いきっかけとなりました。

## 定年退職にあたって

電子情報工学科 塚田 章



平成14年4月に赴任して以来、24年間勤務させていただきました。病に倒れたことも二度ありましたが、教職員の皆様の支えと学生諸君の思いやりのおかげで無事定年を迎えることができました。心からお礼申し上げます。在職中、多くの学生が本校を巣立っていきました。みな社会に出て、それぞれの場所で活躍しています。在学中からその片鱗を見せていた学生もいれば、学生時代からは想像もできない成長を遂げ、後になって驚かされる卒業生もいます。

私が教務主事をしていたころ、オープンキャンパスでよく次のような話をしてきました。高専では、15歳の頭が柔らかい時期から実験や演習を通して専門を学ぶため、早くから専門が身につく、実際に手を動かせる学生が育つということです。また、受験勉強がない分、自分の将来を考えたり、本当に自分のためになる勉強をしたりする時間があることも、高専の特徴だと説明してきました。ただ、その時間は、何もしなければ漫然と過ぎてしまいます。私は長年、学生の成長を見ながら、何かのきっかけや刺激によって「気づき」が生まれたとき、人は驚くほど成長するのだと感じてきました。

最近、昭和を代表する国語教師といわれる大村はま先生の『教えるということ』（共文社、1973）に書かれた次のような寓話を知りました。「仏様がある時、道ばたに立っていらっしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。車は、そのぬかる

みにはまってしまい、男は懸命に引くけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様は、しばらく男のようすを見ていらっしゃいましたが、ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男は引いて行ってしまった。」

この話を、みなさんはどう受け取るでしょうか。もし男がもう一度同じぬかるみに陥ったら、前回の経験から何も学んでいないので、やはり抜け出せないと考えますか。私はそうは思いません。男はこの経験によって、「努力すれば前に進める」という成功体験を得たのではないのでしょうか。仏様がすぐに助けず、必死に努力する姿を見てから指を差し伸べたことに、意味があるように思います。

この寓話は、これまで私が学生の成長を見てきた中で感じてきたことと重なります。ただ一方で、はたして自分は「仏様の指」になれていたのだろうか、という問いも残ります。助けるつもりで手を出し過ぎてしまったことはなかったか、もう少し待つべきだった場面はなかったか。定年を迎える今となっても、その問いに明確な答えを持っているわけではありません。それでも、学生が自分の力で前に進み始めたとき、その背中を見送ることができればそれで十分です。高専という場が、これからも学生と教員の双方にとって、「気づき」をきっかけに大きく成長できる場所であり続けることを願っています。

## 長年お世話になった富山高専へ

電気制御システム工学科 佐藤 圭祐



このたび定年を迎え、富山高専を退職することとなりました。在職31年間、そして学生として過ごした5年間で合わせると、私と富山高専との関わりは36年間になります。人生の大半をこの学校と共に歩んできたことを思うと、感慨深いものがあります。

私は富山工業高等専門学校での15回生で、入学試験の受験番号は259番でした。今でもなぜか、その数字だけは妙に鮮明に覚えています。クラブは電波部で、モールス符号を先輩方に教わりながら、当時流行り始めていたマイコンを自作して動かしていました。特にハードウェア製作が好きで、DRAM回路の電源ノイズが減らず、コンデンサをぶち込みながら何日もオシロスコープとにらめっこしていたことを今でもよく覚えています。そのおかげで電気信号が見えるようになりました。あの頃の時間は、私の研究者としての原点であり、のちに教員として学生と向き合う姿勢にもつながっていたのだと実感しています。卒業研究では村本先生の研究室でお世話になりました。先生の研究に向き合う姿勢を目の前で見ながら自分もこうなりたいと憧れて大学に進学しました。

博士号取得後、富山高専に教員として赴任した当初はサッカー部の顧問を担当しましたが、その後まもなくロボコン（メカテック部）の担当となり、学生が限られた時間と予算の中でアイデアを形にしていく姿を長く見守ってきました。スケジュール通りにロボット製作が進まず、大会当日に動か

ないロボットを前に立ち尽くすしかない選手を見て、「何とか来年こそは、もう少し的確にサポートしてあげたい」と思ったことも何度もありました。十数年ぶりに全国大会に出場できたときには、顧問をやっていたよかったと感じました。

また、プログラミングを学びたいという学生の受け皿として、知能プログラミング研究会を立ち上げ、プログラミングコンテストやWROに参加しました。最初は小さな集まりでしたが、学年や学科を越えて刺激し合い、成長していく様子はとても頼もしく、教員としての喜びの一つでした。

富山高専には、これからも学生が思いきり挑戦できる場所であり続けてほしいと願っています。挑戦には失敗がつきものですが、失敗できる環境があるからこそ、人は伸びます。そして、その挑戦を支える先生方、事務職員・技術職員の皆さまの存在が、この学校の強さでもあります。長年にわたり共に歩ませていただいたことに、改めて感謝しています。

退職後は、実家でリンゴ栽培にも関わりながら、AIを使った栽培の効率化にも挑戦してみたいと考えています。高専で培った「手を動かして確かめる」という姿勢は、農業の世界でも必ず役立つはずだと感じています。また、時間ができたらオートバイでツーリングにも出かけたいと思っています。もし同好の士がいらっしゃいましたら、ぜひお声がけください。

# 引退の辞

## － 2026年2月13日終業式挨拶より－

宮崎 真矢

わたくしは1997年に哲学、倫理社会、思想文化史の教師として富山工業高専に奉職しました。今では何の先生だか自分でもわからなくなっていますけれども、偉くなることはなく、授業をして顧問をして、9つのクラスで13年担任をして、気がつくともう29年が経ってしまいました。頑張ったことはと言えば学級日誌のコメント書き、読んで楽しい学級日誌を追求したぐらいです。何かわかりませんが、そんなわたくしのもとには苦しい人たちが寄ってくるようで、それぞれの時代に出会ったそういう人たちには、これ以上ないほどに甘やかし、わたくしの時間を与え、もう一度自分の足で立ち上がるお手伝いをしてきた（今日の前にもそういう人たちがわずかですがいます）、またはこの学校にとっと見切りをつけておん出ていくお手伝いをしてきたこと。功績なく業績のないわたくしですが、そこだけは自ら誇りとすることができます。

さて、そんなわたくしの教員としての「活動限界」が迫ってきました。昨日生涯最後のテスト返却を終え、もうわたくしは夢にまでみたテストのない世界に半分身を置いています。夜仕事が終わらず朝帰りをする事もなく、家に帰るのに教員室前の行き先表示を「一時外出」にすることもない、日の出の鳥たちの声と共に目覚め、日没と

もに寝ぐらに帰る、本当に人間らしい生活がもう少しで訪れようとしています。ふふん。こんな目のささやかな幸福を口走る者はフラグが立ってしまう、授業でもそう教えましたね。例えば戦いの後に結婚する人。例えば野盗の襲来に話し合いで対処しようとする村長。そんな人たちほど真っ先におっちんでしまう、そういうフィクション上のお約束があるようです。ところがどっこい、わたくしはまだ逝くつもりはありません。読みたい本も知りたいことも山ほどあります。そういう欲望を満たすには、今まで生きてきた63年と同じぐらいの年月が必要です。126歳まで生きる、なんて言ったらさすがに欲張りなので、そう、1年生がわたくしの年齢になるまではいる、と言っておきましょう。47年？110歳？笑っちゃうね。

とまあ、いつものようなくだらぬ話をしてきましたが、そろそろお別れを言う時がやってきました。再雇用で残らないし非常勤もなし。もう富山高専の教壇に立つことはありません。いや、そもそも教員というものから足を洗って、富山で好き勝手な人生を送っている予定です。最後に出てくる言葉は「ああ、おもしろかった！」それぞれの時代に少し深く関わってくれた人たちへ。「楽しかったね。ありがとう！」でもおしまい。これでいいのだ！

# 近況報告

卒業学科の「略称」と「期」については同窓会HPを参照ください。

## 機4 嶋田 颯太

私は2018年に機械システム工学科を卒業いたしました、嶋田颯太です。本科卒業後はコマツNTC株式会社に入社し、現在まで生産設備の設計業務に携わってまいりました。主にクランクシャフトミラーや研削盤の生産設計、加工プログラム設計を担当しており、仕様打合せから設計・作図、部品手配に至るまで一連の工程を幅広く担当しています。まずは引合グループからいただく情報を基に計画図を作成し、お客様との仕様確認を進めます。その後、決定した内容に沿ってCADで3Dモデルや図面を作成し、設備を形にしていく作業へと移ります。設備が完成するまでの流れに一貫して携わるため責任も大きいですが、その分やりがいを感じられる仕事です。

また、通常的设计業務に加え、本校のリクレーターを務めさせていただく機会にも恵まれています。母校の学生と直接接し、自社の魅力や仕事内容を伝える活動は、自身の経験を振り返る良い機会にもなっています。さらに、社内では本部全体で取り組む業務改善プロジェクトのリーダーも任されており、メンバーと協力しながら業務効率向上に向けた取



長男との写真

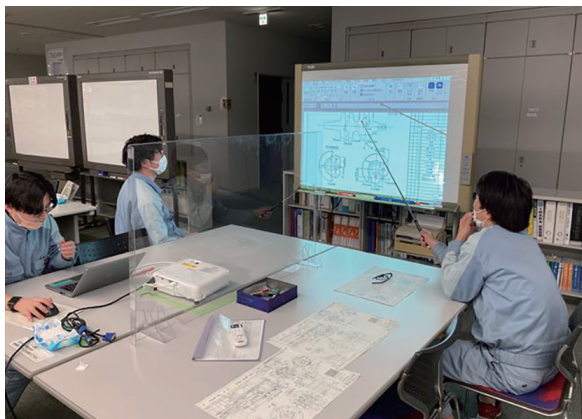
り組みを進めています。こうした役割を通じて、組織の中での責任範囲が徐々に広がっていると感じています。

社会人として働く中で特に実感しているのは、社内外問わず「コミュニケーション能力」が非常に重要であるという点です。お客様の要望を正確にくみ取り、社内の関連部署と連携を取ることが、最終的な成果に直結します。また、「仕事の成功は段取りで8割決まる」とよく言われますが、事前準備や計画の有無が仕事の進み方に大きな差を生むことを強く学びました。

プライベートでは二人の子どもを授かり、にぎやかで充実した日々を過ごしています。



業務の様子



家族の存在が大きな励みとなり、仕事へのモチベーションにもつながっています。

今後も富山高専で培った基礎力を大切にしながら、技術者としてさらなる成長を目指して努力してまいります。引き続きどうぞよろしくをお願いいたします。



職場メンバーとの飲み会の様子

## 情10 中井 健人

2024年に電子情報工学科を卒業いたしました中井健人です。私は本科を卒業後、東京大学へと編入いたしました。

東京大学ではシステム創成学科という学科に属しております。この学科の特徴として、実験ではなくプロジェクト演習という授業があります。プロジェクト演習では、いくつかのテーマから一つを選び、数週間かけてグループで課題に取り組みます。この授業で与えられる課題のほとんどは、いわゆる「正解のない問い」です。「この手法を使うこと」という条件以外はほぼ白紙で、課題そのものを自分たちで見つけるところから始まります。そしてその課題を解決する方法をグループで模索し、最終的に成果として発表するのです。

正直に言うと、この授業には大いに苦労しております。高専時代は与えられた問いに答



関東大会での集合写真

えることが中心でしたが、ここでは「何を問うか」ということでさえ自分たちで決めなければなりません。最初はどこから手をつければよいか分からず、グループ内での議論も迷走することが多々ありました。しかし試行錯誤を重ねるうちに、答えのない問題と向き合う姿勢や、チームとして意見をまとめていく力が少しずつ身についてきたように感じています。



ソウル大学との交流

また私は大学で運動会剣道部にも所属しております。高専時代も剣道を続けておりましたが、大学の部活動は規模も雰囲気も全く異なります。部員数は高専とは比べものにならないほど多く、練習の頻度や強度も格段に上がりました。何より、全国から集まった本気で

剣道に向き合う仲間たちと稽古を重ねる中で、自分の甘さを痛感する場面も少なくありません。また、他大学との合同稽古や、剣道に関心を持つ外国人学生と交流する機会もあり、剣道を通じて高専時代には想像しなかったような広がりを感じています。それでも、高いレベルの環境に身を置くことで、剣道の面でも確実に成長できていると感じています。学業と部活の両立は容易ではありませんが、互いに良い刺激となっています。

編入という選択をして、あらためてよかったと感じています。高専で学んだ専門知識を土台に、東京大学という新たな環境で学び直すことで、自分の視野が確実に広がりました。苦労することも多いですが、それ以上に得ら

れるものの大きさを日々実感しています。

最後に、卒業後も、高専時代の友人たちとは変わらず良好な関係を続けております。共に過ごした日々で築いた絆は、今も私の大きな支えです。これからも人との繋がりを大切にしながら、前向きに歩んでいきたいと思ひます。



高専時代の友人との卒業旅行

## 物6 不破 涼佳

物質科学工学科2020年度卒の不破涼佳です。私は富山高等専門学校を卒業後、金沢大学へ編入し、工学分野を中心に学びを深めました。高専での5年間は、研究者としての基礎を身につけるとても貴重な時間でした。特に4年生になると実験の量が一気に増え、自分たちで条件を考え、結果を整理し、レポートとしてまとめるという一連の流れを繰り返す中で、考察力や実験力が大きく鍛えられました。当時は大変でしたが、その経験は今でも大きな財産です。金沢大学でも「実験が得意な学生」と見られるほど、高専で培った力の大きさを実感しました。

大学院に進学後、材料とプロセスの領域で研究に取り組み、基礎化学と応用技術の両面から課題を捉える力を養いました。実験計画の立案やデータ解析を通して、ものづくりに必要な論理的思考や問題解決力がさらに鍛えられ、研究者としての視点が深まったと感じ



デスクワークの様子

ています。

修士課程修了後はYKK株式会社に入社し、現在は研究開発部門であるテクノロジー・イノベーションセンターに所属して2年目になります。資源循環やプロセス開発に関わる研究・試作を担当しており、環境に配慮した次世代材料やエネルギー技術の開発に携わっています。新しい素材を安定して製造するためのプロセスづくりや、カーボンニュートラルに向けた技術の調査・評価など、持続可能なものづくりに貢献する業務が中心です。社会全体の課題に向き合う仕事であり、責任の重

さとやりがいを日々感じています。

入社後は研究だけでなく、契約関連や事務業務、報告書作成、装置導入の手続きなど、幅広い業務を任されるようになりました。分からないことも多く戸惑うばかりで、純粋に実験だけに集中できた高専時代をうらやまし



打合せの様子

く思うこともあります。これだけの業務を任せていただける環境にはとても感謝しています。その分、会社に貢献したいという思いで、日々の仕事に取り組んでいます。

そして、社会人になってからも学びは続きます。社会に出れば座学的な勉強は必要ないと思っていましたが、実際には新しく学ぶことがたくさんあります。高専時代に持っていた「学びたい」という純粋な気持ちは、社会に出てからも非常に大切だと強く感じています。何にでも好奇心を持ち、前向きに取り組む姿勢は、社会人として大きな力になります。学生の皆さんには、この気持ちをいつまでも大切にしてほしいと思います。



分析評価の様子

## 物6 藤田 直哉

富山高等専門学校 専攻科 制御システム工学専攻を2023年に卒業しました藤田直哉です。

現在は、ネットワークセキュリティ製品の開発・提供を行う株式会社 網屋に勤務しています。

就職を機に上京し、都会での一人暮らしから始まった社会人生活も、早いもので4年目を迎えました。平日はスピード感のある仕事に身を置き、休日は関東近郊に住む高専時代の友人たちと集まって、当時と変わらない雰



囲気で遊びに出かけることが、何よりのリフレッシュになっています。

入社当初は、自社製品の顧客サポー

トとして、電話やメールでの技術相談対応がメインでした。現場で発生するリアルなトラブルに向き合う中で、技術の基礎を徹底的に叩き込まれました。現在は、その経験を活かし、製品の「提案」や「導入支援」へと業務の幅を広げています。お客様の抱えるネットワーク課題をヒアリングし、最適な構成を設計して導入までをトータルでサポートする仕事です。また、チームリーダーとしてメンバーのマネジメントにも携わるようになり、個々の技術力だけでなく、組織としていかに価値を提供するかという視点で日々奮闘しています。

私が担当している主軸製品「Verona（ヴェローナ）」は、IT業界で注目されている「SASE（サッシー）」というコンセプトを実現するクラウドサービスです。従来、企業のセキュリティは「オフィスという境界」を守れば十分でした。しかし、テレワークの普及やクラウド利用の拡大により、社員は「どこからでも、どんなデバイスからでも」社内データにアクセスするようになりました。Verona

は、ネットワーク接続と高度なセキュリティ（ファイアウォールやアクセス制御など）をクラウド上で一体化して提供します。複雑な設定や運用を専門エンジニアが代行する「フルマネージド」という強みを持っており、IT人材不足に悩む多くの日本企業のインフラを支えています。

今の仕事を通じて痛感しているのは、サイバーセキュリティはもはや「ITの一部門」ではなく、社会を支える「インフラ」そのものだということです。一箇所の脆弱性が企業の存続を揺るがす事故に直結する現代、私たちが提供する技術は、お客様の日常を守る最後の砦です。この責任ある領域で、私は今後、常に変化するセキュリティトレンドを技術的に深く理解し、的確なソリューションを提示できるエンジニアであり続けたいと考えています。と同時に、チームリーダーとしての経験を積み、個々の技術を組織の力へと昇華させられるマネジメント能力も磨いていく所存です。

## 同窓会事務局へメールアドレスの登録をお願いします！

富山高専同窓会事務局から会員の皆様への情報の提供や案内の連絡等は、基本的に郵送等ではなく、E-mailにより行っています。また、本同窓会の名簿管理システムにログインに必要なパスワードの発行に係る本人確認等も、E-mailにより行っています。

会員の皆様には、同窓会事務局にご自身のメールアドレスの登録をお願いします。

富山高専同窓会HP  
TOP画面

会員の皆様へ

メールアドレスの登録  
をお願いします。

富山高専同窓会では、メールアドレスを登録していただいた会員に対し、今後開催される総会や会報等の情報をご案内します。

ぜひともメールアドレスを登録していただき、同窓会活動へのご協力をお願いします。

また、登録済みのメールアドレスを変更する場合も、再度登録願います。

登録はこちら

### 新理事着任のご挨拶

同窓会の皆様、はじめまして。機械工学科40期生の向川真太郎と申します。この度、ご縁をいただき、同窓会理事を拝命いたしました。

私は2010年に専攻科を卒業後、東京工業大学大学院へ進学し、修了後は自動車メーカーにて技術職に従事しております。設計業務からキャリアをスタートし、北米拠点のR&Dへの出向、帰国後は商品企画や新規事業企画を担当し、現在は経営戦略業務に携わっております。

現在、私たち日本を取り巻く環境は大きく変化しており、私が身を置く自動車産業もまた、技術革新や業界再編の中で転換期を迎えています。時代が大きく動く今だからこそ、個々の力だけでなく、「つながり」の重要性を強く感じています。

富山高専で過ごした学生時代は、楽しいことも苦しいことも含め、私の原点です。進むも退くも自らの選択であった日々は、「自分の人生は自分で切り拓く」という姿勢を教えてくださいました。そして何より、先生方、先輩方、同期や後輩との出会いが、今の私を支えてくれています。

一昨年、当時の副校長であった佐瀬先生より、就職活動を迎える学生の皆さんへお話しする機会をいただきました。学生たちの真剣な眼差しに触れ、世代が変わっても本質的な学びや志は受け継がれていることを実感しました。同時に、私たちOBが経験や想いを次の世代へつなぐことの意義を強く感じました。同窓会は、単なる名簿上のつながりではなく、世代を超えて知恵や経験を分かち合い、互いに刺激し合える大切な場であると思っています。先輩方が築いてこられた歴史の上に、私たちの世代が立ち、さらに次の世代へとバトンを渡していく。その循環こそが、母校の価値をより高めていくのではないのでしょうか。



一昨年、富山高専本郷Cでの講演の様子

このたび理事のお話をいただき、微力ながらその橋渡し役を担えればとの思いから、謹んでお引き受けいたしました。世代を越えた交流がより活発になり、富山高専のつながりが一層強く、温かいものとなるよう尽力してまいります。富山高専がこれからもますます発展し、卒業生一人ひとりがそれぞれの場で輝き続けられますことを心より願っております。

今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。

### 新理事着任のご挨拶

このたび、富山高専同窓会の理事を務めさせていただくことになりました、機械工学科40期生の才記由次です。歴史ある同窓会の活動に関わる機会をいただき、大変光栄に感じております。どうぞよろしくお願いたします。

私は富山高専を卒業後、航空業界で技術職として働いたのちにエアラインパイロットを目指しておりました。最終審査まで進みましたが、残念ながら結果は不合格となり、進路を改めて見つめ直し、長岡技術科学大学大学院へ進学、修了後は半導体製造装置業界にて設計開発に約10年間従事しました。現在は損害保険鑑定人として、事故や災害による設備・機械の損害調査などに携わっています。振り返る

ときさまざまな分野を歩んできましたが、どの仕事においても富山高専で学んだ基礎的な技術力やものづくりの考え方が大きな支えとなっています。

今回、理事をお引き受けすることになったきっかけは、在学当時大変お世話になった恩師である佐瀬先生からのお声がけでした。学生時代から変わらず母校を思い続けておられる先生から推薦をいただき、「少しでも母校や同窓会に恩返しができれば」という思いでお引き受けすることを決意いたしました。

私にとって富山高専で過ごした日々は、まさに青春そのものでした。仲間と共に学び、悩み、挑戦した時間は、今でも人生の大きな財産です。多くの思い出がありますが、特に印象に残っているのが製造実習です。鋳造、溶接、旋盤やフライス盤などの各種工作機械による機械加工など、実際に手を動かしながらものづくりを学ぶ経験は、今振り返っても非常に貴重なものでした。中でも鋳造の実習は強く記憶に残っています。入学して間もない16歳の頃、真っ赤に溶けた鉄を炉から受け取り、それを鋳型に流し込む作業を体験しました。全員が本能的に命の危険を感じるような緊張感の中での作業でしたが、だからこそものづくりの迫力や責任の重さを身をもって理解することができました。富山高専だから学ぶことができるこうした実践的な経験が、後の仕事においても現場感覚を持つことにつながり、今の自分の仕事にも確実に活かしていると感じています。

新理事としては、同窓会の活動を通じて母校と卒業生のつながりをより深めていきたいと考えています。世代や地域を越えて多くの同窓生が交流し、すべての同窓生が「富山高専に入学して良かった」と感じるような活動を進めていきたいと思っています。

まだまだ至らない点も多いと思いますが、同窓生の皆さまと力を合わせながら、母校と同窓会の発展に少しでも貢献できれば幸いです。今後ともご指導、ご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。



薬師岳山頂にて



小笠原諸島 南島にて

## 編集後記

会報No.6をお届けします。本号に寄稿頂いた卒業生、在校生、そして校長先生はじめ教職員の皆様に感謝いたします。

本年度の高専ロボコン東海北陸地区大会は、10月に本校（本郷キャンパス）の主管で富山市八尾にて開催されました。その結果、全国大会出場枠4チームのうちの2チームを本校のチームが占めるという快挙を収めました。私も喜び勇んで11月の全国大会にも応援のため両国国技館に出かけましたが、前日の抽選で初戦カードは、あるうことか「本郷キャンパスのチーム」対「射水キャンパスのチーム」、つまり富山高専同士の対戦となり愕然としました。校長先生はどちらを応援しているのだろうか、と余計な心配をしながら両チームがベストを尽くせるようにと祈るばかりで、両チームの健闘に拍手を送りました。また、同じく10月に下関の三菱造船所で新若潮丸の「命名・進水式」に立会う機会を得ました。人間に例えると「へその緒」を切ることに相当する「支綱切断」の後、大きな船体が動き出して「巖流島」が浮かぶ関門の海へ進水する瞬間を間近に見ることができました。

この同窓会報を通して生き生きした母校や卒業生の様子を同窓の方々に紹介できればと思います。卒業生の方々からの会報への寄稿をお待ちしています。

富山高専同窓会理事 水谷 淳之介